
らき すた 紅蓮の若武者

神代七夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

らき すた 紅蓮の若武者

【Nコード】

N5045P

【作者名】

神代七夜

【あらすじ】

かつて甲子園で優勝した国生大和は代々伝わる神社と武道の後継者であった。

あれからしばらく経った後、霊力修行で訪れた鷹宮で彼は新しい出会いをする。

そして、かつて修行で失った記憶と本来の自分らしさを取り戻していく……。

第一話 舞い降りた若人

その年の甲子園は異様な熱気に包まれていた。史上初の岩手の高校が優勝まで後一步まで迫っていた。0対2、9回表、2死ランナー無し、カウント2ストライクノーボール。相手の打者は今大会注目の4番。

マウンドで背番号1をつけた投手が最後のサインを交わす。歓声と応援、ブラバンの嵐がより一層激しくなる。

その試合の100球目だった。大きく振りかぶって投げられたボールは本日最速の球速で真ん中に迫る。相手打者のバットは空を切り、ボールはキャッチャーミットに収まった。

「ストライクバッターアウト！ゲームセット！」

投手が雄叫びを上げ、野手がマウンドに集まってくる。

ついに、岩手県の高校が夏の甲子園を制覇した瞬間だった。

あれから半年以上経ち、今度は選抜甲子園の話題に溢れる3月下旬、柊家のチャイムが鳴った。

かがみとつかさは居間でこなたと遊んでいたが、その手を止めて玄関へと向かった。

ドアを開けると、かがみたちと年頃の変わらぬ青年がいた。その顔

には見覚えがあつた。かつて、豪速球を武器に甲子園を制覇したあの投手だった。

年頃は変わらぬというのに、凜とした表情には一切の隙が無く、幾つもの傷跡があつた。しかし、そんな中にも彼本来の優しさがそこにはあつた。

「柊ただおさんは居られますか？」

なぜ、父親に用があるのか、かがみは解らなかったが、とりあえず呼びに行く。

「そうか……。もうそんなになつたのか……。」

かがみがただおに「彼」のことを告げると、どこか感慨深そうな表情をした。

「久しぶりだね、大和くん。」

「はい、父よりあなたの話は伺っております。」

玄関から居間へと場所は変わり、2人は対座していた。2人の口調は穏やかだった。

「あの……。国生くんはなんでこっちに？」

かがみが二人にお茶を持ってきた。すでにつかさここなたは部屋に行っている。

「すみません。」

「別に同年でしょ？タメでいいわよ。ちなみに、私の名前はかみよ。」

「しかs構わないよ？」・・・」

「そうですか・・・。俺の家も代々神社なんだが、親父とただおさんは旧知の仲でな。んで、親父から霊力修行のために、ただおさんのところに行けといわれたんだ。就職先もそれに合わせてある。」
先程までの隙の無い表情から一変し、年相応な表情になる。

「昔、この子達と遊んだこと、覚えているかい？」

「え、私たち会った事あるの？」

「一度だけだがね。近所の子達も集まって、それは楽しそうだった。」

「あー・・・そういえば、どっかに家族で遊びに行ったときにそんなことがあったわね。それが大和君達だったんだ」

「覚えていません。実は、修行の際負った傷で、記憶が一部吹っ飛んでしまい、幼少期・・・特に5、6歳あたりの頃を殆ど覚えていないんですよ。」

苦笑いしながら話す大和の顔には幾つもの傷がある。そういえば、結構話題になっていた。実はヤンキーなんじゃないかとか。

「それは残念だね。まあ、何はともあれ、これからよろしく。住む所は決まっているのかい？」

「ええ、近所のアパートに。荷物は明日届く予定です。・・・ところで、そこにいるヤツ、盗み見てないで入ったきたらどうだ？」
襖を向いて、声をかける。

「バレたか・・・」

「あはは・・・」

つかさとこなたが入ってきた。

「何してんのよあんたらは・・・。」

「いやゝかがみん何を話してんのかと。で、何？許婚？」

「ちがうわ！」

「んじやつかさの？」

「おおよ・・・。お父さん、本当？」

つかさが顔を真っ赤にしながら俯く。

「部外者は黙っててくれないか？」

大和がこなたの背後に回り頭頂部を掴む。

「え、いつのまに・・・遅い！！！！」○×　！？*@！！！！」

60kgはゆうに超える握力がこなたの頭を5方向から襲う。あえなくこなたは撃沈した。

「ははは、違うよ。この人は僕の友人の息子で国生大和君だ。去年の甲子園で話題になっていただろう。こっちには霊力修行で来たん

だよ。」

「へーそうなんだ。よろしくね。私の名前はつかさだよ。」

「こちらこそよろしく頼む。」

「僕の娘だからといって、別に敬称をつけろとは言わないし、敬語も使わなくていいよ。」

「別に同年だしね。」

「そうか・・・。」

「これはフラグが立ったのかな・・・？」

何時の間にかこなたが復活していた。不敵な笑みを浮かべながら・・・。

「ふふふ、国生大和め、よくも・・・。」

こなたが飛び掛ろうとしたが、恐ろしいまでの強力な大和の氣に当てられて沈黙する。唯一、ただおだけがやわらかな笑みを浮かべていた。

「ちなみにこいつの名は？」

「泉こなた。高校時代からの友達よ。他にも親しい人が数人いるんだけど、今日はいないわ。」

「そうか、賑やかで結構。」

その夜、柊家では大和の歓迎パーティが開かれた。さて、これからどうなることやら。

第一話 舞い降りた若人（後書き）

大和のプロフィール（公式ファンブック風）

誕生日 8月15日（獅子座）

身長 177cm

血液型 AB型

利き手 右（右投げ左打ち）

好きな色 赤、水色、白

髪の色 猩々緋（R201、B48、G27）

瞳 緋色（211、56、28）

趣味 読書、ゲーム、運動

好きなもの 野球、肉料理、落語、民謡

嫌い 重い揚げ物、ケバい格好

得意教科 国語、測量、土木施工

苦手 英語

こんな感じです。

第二話 変わり行く日々

く大和視点 アパート1階く

夢を見ている・・・何時の頃だろう。小さな子供達が遊んでいる。少人数ではない。10人以上は集まっている。誰の顔にも笑みが溢れているが、ちょっと不安げな顔をしているのがほんの数名。けど、かといって楽しめていないわけではない。単に人見知りのようだ。

何故、今こんな夢を？夢自体ここ数年見ていない。それほどまでに熟睡していると言うのに・・・。

ピピツと連続で鳴る電子音が俺を夢から覚ます。まだ朝5時半だが、俺にとってはいつもどおりだ。さて、今日も頑張りますか。

引越したばかりの6畳一間（1LK、風呂・トイレ別、窓向き東・南）の部屋は何も無い。昨日持ってきたわずかな荷物があるばかりだ。日用品、着替え、今読んでいる2、3冊のマンガと本、DSSとPSP、そして包みに入っている武器。

ジャージに着替えて武器を取り、外に出ると心地よい風が吹きぬけた。さて・・・朝稽古だ。ランニングしながらいくとしよう。

く鷹宮神社 境内く

刀を振り抜く音と足を踏み出す音が境内に響く。今までは父さんとか身内に見てくれる人がいたが、今日からは一人だ。型の崩れには注意しないとな・・・。

「おはよう、大和君。」

「おはようございます、師匠」

気配を察して振り向くと、お勤めに来た師匠^{ただあさん}がいた。

「今の技は一之太刀 白刃一閃だね？」

要するに居合切りのことだ。俺の流派は居合や剣術それら全ての統合系を刀道としている。

「良くご存知で・・・って父さんの見てたから覚えたんですか？」

「ああ、だが見てただけではないよ。実際に刀道を少しだけ教わったんだ。この神社を守りたかったからね。」

父から聞いたことがある・・・。かつて地上げ屋によってこの土地も危ないところだったという。それを俺と同じように修行にきていた父さんと共に撃退したとか・・・。

「まあ、ただ単に迫力が欲しかっただけなんだけどね。気が付いたら稽古に付き合えるぐらいにはなってたよ。最も、もうかなりの時間が過ぎた。かつての力はもう無いさ。」

「迫力だけでいいんですよ。稽古で培った気迫で相手を傷つけずに負かすのが、活人剣の極意ですから。」

「そうだね。ところで、弓道と槍の稽古はしないのかい？」

流石に新幹線の中には持ち込めなかった。今日届く荷物の中に古畳と共にある。古畳を何に使うかって？弓道の安土（的）の後ろに盛る

矢止めの土）代わりだ。

苦笑しながら本殿に向かう師匠を見送り、体術の稽古に移った。

稽古を終えて時計を見るとすでに7時半。さて、戻って朝飯を食べるとするか。つっても、食材がほぼ無いから、昨日買った惣菜パンになる。買い出しがないとな。頭の中で予定表を作成しながらアパートに着いた。

くかがみ視点 自宅、台所く

朝のお勤めを終えたお父さんを見ると、どこことなく楽しそうだった。ちなみにつかさはまだ寝てたりする……。

「お父さん、何かあったの？ずいぶん楽しそうだけど。」

朝ご飯の席で尋ねてみる。

「ああ、今朝、朝稽古に来ていた大和君と境内で会ってね。その時の彼の動きが、父親と瓜二つで、まるで彼の若い頃を見ているようだった。」

どこか懐かしそうなお父さんの顔を見ると、寂しい感じがした。私たちには見せたことの無い顔だった……。たぶん、大和君を息子のように思ってるんだろう。

「そういえば、大和君のところ、今日荷物が届くって言ってたわよね。かがみとつかさで手伝ってあげたら？」

お母さんからの提案。別に今日は特にやることも無いし、約束事も無いけど……。

「運動になるわよ?」

よし、行こう。・・・でもなんか引つかかる気がする・・・。まあいいわ。さっさとつかさを起こして行くとしましよう。

「アパート 1階」

「すまん、2人とも。助かる。」

ダンボールの箱が結構ある。さて、どうしたものかしら。

「家具類は俺がやつから、本とかそういうの片っ端から入れてって」

予定の位置に置かれた本棚の中に私とつかさで本を入れていく。専門書や資格の問題集の中にラノベやマンガなども含まれていた。

「大和君もこういうの読むんだ。」

「高校で知り合った友人からアニメの話聞いて、見てみると面白かったから原作にも手を出したってわけ。中学まで深夜アニメとかラノベとか知らなかったけどな。」

ラックを設置し終え、今度は冷蔵庫を運びながら大和君は答えた。

数十分後・・・。

「お疲れ。2人ともありがとう。予定より、もの凄く早く終わった。1時間経ってないな。だいぶ、余裕が出来た。」

ジューズを手渡された。一仕事終えた後は美味しい。

「ううん、別にいいよ。ところで、その鎧は何？」

武具と共に置かれた鎧をつかさは指差していた。

「ああ、俺の流派で使う修行道具。」

「ふーん・・・ところで、大和君て神主とは違うんだよね。」

「祭文唱えて祓えをするより、むしろ呪とかを返し、悪霊を退治する。そのための霊力修行だ。早い話が妖怪退治みたいなもんだよ。だからそういうの見ることも出来る。」

「怖くないの？」

ホラーやオカルトが苦手であるつかさにとっては辛い話題のようね。もつとも、私も藁人形とかを見るのは辛い。激しい怨念が伝わってくる。

「生きてる人間の方がよっぽど怖い。生成になったらその人は助けられない。あと、ガキの頃、都会に行くと人ごみの中、殺意、憎悪、絶望が目に見えて渦巻いている人を何人も見かけたことがある。だから今でもあまり近よりたくは無い。」

私たちは祝詞を唱え、御幣によって祓えをしている。けど、大和君は違う。実際に戦うことで悪霊やらを鎮めているんだ・・・。

「そんな顔せんでくれ、お二人さん。本当の仕事は靈力を使って郷を守るからだから。あくまでついでだよ。ついで。」

苦笑して大和君は答えた。

「さて、買い出し行かないといけないんだが、こちら辺のスーパーで結構近いか、品揃えがいいところ知らんか？」

「あ、それなら私がよく行くところかな？丁度買いに行きたいものがあつたし。」

つかさが珍しく張り切った様子だ……。今まであまり頼られたりする事無かったからな。

「んじゃ、つかさ、案内頼めるか？かがみ、ちょっと手伝ってくれ。何分、品物が多すぎるから。」

〈大和視点〉

歩きながら高校の時の他愛もない話で盛り上がる。自ずと、昨日話していた「親しい友人」の事も出る。

「・・・それでねこなちゃんのお父さんて、作家さんなんだよ。いつも作無依来てて、この時期は妖しさ満載なんだって。何でも、花粉症でサングラスとマスクつけてるらしいから。」

「・・・あんな感じか？」

俺の指差した方には警察から職質を受けている中年の男性がいた。

「こなたのお父さんだ……。何故また……。」

「じゃあない……。誤解解きに行こう。」

数分後……

「いやー助かったよ。あれ、君は？」

この中で面識が無いとすれば俺一人。当たり前か。

軽い自己紹介をする。高校野球に興味がないのか、俺の名前を聞いても特に反応は示さない。こっちとしてもやりやすい。はつきり言うて地獄だったからな……。

聞けば俺たちと同じスーパーに買い出しに行くとのこと。自ずと同行することになる。

話をしていると、俺の好きな小説の作者だった。一気に話が盛り上がる。

10分も歩けば見えてきた。確かに近い。後は品揃えを見るだけと思ったが、有名なスーパーだったからその心配は無い。

ものの十数分もすれば買い物は終わる。品物の数自体は多いが問題はない。これぐらいは合宿の買出しで慣れてる。両手首に3つずつの袋を下げ、その状態から右肩にトイレトペーパー、左肩にティッシュを担ぐ。重さ自体はまだ平気だが、さすがにスペック（腕）が足りない。カ。リキーが羨ましいな……。

「すまないね。俺の分まで持つてもらって。」

「いえ、ファンなら当然でしょう？それに、運動になりますし。」

途中でそうじろうさんと別れて家路につく。左右の重量バランスが若干崩れたが、気にはならん。

「実質的に、今日から一人暮らしが始まるわけか・・・」

「不安なの？」

「まあ・・・な。でも、それ以上にワクワクする・・・！」

つかさからの問いに薄笑い込みで返す。知らない町、知ってるやつは皆無、当然不安と言っちゃ不安だろう。

だけど、そんな場所だから過去を一切気にせず、全力で新たなスタートを切ることが出来る。

「あ、そうだ。明日こなたたちが来るんだけど、何でもホームステイすることになった外人さんに、私たちの紹介と日本の文化について教えて欲しいんだって。」

「紹介は別にどーでもいいんだが、日本の文化を教えるのはいいな。逆に、教えられることも多々あるし。」

二人とも別れ、一人家路を歩く。

アパートに戻ると大家が俺を待っていた。宅配便を預かっているら

しい。即座に引き取り、部屋に戻る。

「さて……1日ぶりだな。」

やっと弓と矢、そして槍が届いた。専用の袋から出して握りを確かめれば感覚が体の奥底から湧き上がる。

「これで……普通に修練が出来る。」

さて……明日も面白くなりそうだ……。

第二話 変わり行く日々（後書き）

いかがでしたでしょうか。感想お待ちしております。

第三話 集う人々（前書き）

震災で僕のところは6強を記録し、地割れ、起伏などが起こりました。

いつ、強い余震が起こるかと不安でいますが、負けずにいきたいと思います。

こういうとき、土木科で習ったことが活かされますね。

第三話 集う人々

〔AM6:30 鷹宮神社境内 大和視点〕

刀と体術はともかくとして一日ぶりとなる槍と弓の修練は感覚がやつぱり鈍ってる。古来より「一日休めば元の状態まで三日かかる」と言われているがつくづく実感する。

槍はだいぶ動きが荒くなっているし、弓は矢所がばらけている。無理を押しても持つて来るべきだったか……。いやいや、置き場所どこにかあったか？スキー用のじゃ俺が使っている四寸伸の「粹」と「肥後蘇山」は入らなかつたろうしな……。

とはいえ、それ程大きく崩れてはいないようだし、的中率も8割前後と、いつもと同じくらいだから、そんなにはかからんだろう。そこまで体に文字通り刻み込まれてるのか……。小さな傷跡を見ても思わず笑っちゃう。

「さて、今日はどんな一日になるやら。カオスな事になりそうだが」
伸びをしつつ空を見上げてみれば気持ちいいくらいの青空。快晴ではなく、雲が少しある位の絵になるような丁度いい空だ。

「杞憂か……。ま、もしカオスだとしても、楽しいことにはなりそうだ。」

さて、腹も減ったし、もう少ししたら戻ろう。朝飯は何にするか？

〈AM10:00以降 柊家 つかさ視点〉

こなちゃんもゆたかちゃんに連れられて、留学生だというパトリシアさんがやって来た。それに少し遅れて大和君も来た。背中に細長い袋を背負っているけど、なんだろう？

「やっぱり男の子がいると雰囲気が変わるわね。」

お母さんからの言葉で思わず大和君を見てしまう。

「ふふふつかさ。フラグ立ったのかな？」

こなちゃんからのダメだしで、顔が真っ赤になるのを感じる……。

とりあえず、落ち着くのを待ってから、話の輪の中に混ざった。

「そういえば、大和さん、プロへの道は考えてなかったんですか？」

ゆたかちゃんの質問で、皆が注目する。確かに、結構騒がれていたっけ。

「ゆーちゃん、知らないの？甲子園で活躍したピッチャーって、プロでは大成しないというジンクスがあるらしいよ。」

「随分古いジンクスだな……。それはさておき、プロ野球よりも

やりたいことがあった。ただそれだけだよ。それにプロよりアマの草野球の方が好きなんだ。」

「……どこことなく、大和君の言葉に違和感があるような感じがする。だけど、それが何かわからない。だけど、確実に言えるのは本心ではないということかな。」

話題がいろいろ変わっていった、マンガとかの話になった。

「そういえば、恋愛ものとかで主人公とヒロインが結ばれたところで終わりっていうのあるでしょ。私その続きが気になっちゃったりするんだけど。」

「あ、それ私もわかります。その後どうなったのかなって。」

「読者が想像できる幅残してるんじゃない？」

そうなんだろうけど、でも私はそのあとが気になる。

「ていうか、漫画も娯楽の一部なんだし一番面白いところまで終わりって事なんじゃない？結婚は人生の何とかとも言っし。」

「……あいかわらずこなちゃんは手厳しい。」

「ダカラとイッて、ヘンにゾクヘンやつたりするト、タイヘンなコトになったリシマス。」

「確かに。ゲームでも前作よりもシステム面で劣ってしまうのは良くあることだ。」

「ていうか、マンガやアニメばかりじゃなくて日本の遊びとか教えてあげなさいよ!」

そういえば、それが目的だったわけ。巫女の準備さえ整ってればって言われた時はビックリしちゃったけど。

「たとえば?」

「え、竹馬とか、剣玉とか・・・。」

確かにそうだけど、やったこと無いし、それ以前に家にあつたかな? あ、でも・・・

「そういえば大和君、武道やってるんだったよね?」

「だったら見せてくれない? このままだとかがみにどやされそうだからさ。」

「見世物ではないが・・・ダメな日本人と思われたくないしな。ただ今回だけにしといてくれ。所詮人殺しの技だからよ。・・・じゃあ、移動するか?」

「え、どこに行くんですか?」

「広いところ・・・神社の境内のほうがやりやすいし安全だろう?」

〔鷹宮神社 境内 大和視点〕

藁を束ねたヤツを立てて袋から刀を取り出し鞘から抜き放つ。本当は畳を使うが、持ってくるのが面倒だし、何より明日からの矢止め

が無くなるから代用させよう。

幾重にも鍛えられた鋼の刃が鈍く、重く光を反射する。よく土産物とかで売っている模造刀のようなギラギラ光るようなものではない。いうなれば、ベテランの貫禄とでも言っておけばいいだろうか。大きく動かずとも僅かな動きだけで捌いてみせる。そこまでの領域に早く達したいものだ。

立てた藁に対し真一文字に構え意識を集中させる。風も、音も感じなくなり、刀の重ささえ気にならない。

「刹那」

〈こなた視点〉

一瞬のことだった。初めて会ったときとは違うオーラを感じた瞬間だった。

5mぐらい離れたところから一気に詰め寄って藁を斬っていた。3秒もかかってないと思う。それ程早く、かつ正確な剣技だった。イメージするならハル。ちゃ。の1。話で。門が提供された日本刀で蕪を斬ったシーンがぴったりだと思う。

私も幼い頃は格闘技をやっていたからか、僅かにはあるけど太刀筋を「見る」ことはできた。でも、それを「捌け」といわれたら無理。あの藁みたいにされてしまうのがオチってもんでしょ。

敵いそうにないね。よく一昨日あんなことができたもんだよ。

「これでいいか？」

驚き、懼れる私たちをよそに当の本人は淡々と斬った藁を片付けている。彼にとっては当たり前のことなのだろう。

「ハイ、すっかりト見せてもらイマシタ。まさニサムライデスネ！」

パーティはそれと同時にどことなく興奮した様子だ。もつとも、私自身稀にしか見られないようなものを見させてもらっているから結構興奮している。でも、何故だろう？どことなく不安感というか、風が吹けばあっさりと吹き飛んでしまうような危うい感じがする。

もつとも、彼なら吹き飛ばされるどころかその風に上手く乗ってどこまでも飛んでいきそうだけだね。

〈午後9時過ぎ 鷹宮神社 大和視点〉

暗闇にも目が慣れてくると普段とは変わらない。むしろ、余計な視覚情報が入りにくいから集中しやすい。

「久しぶりだったな……。あんだけのバカ騒ぎは。」

この時間帯なら酔っ払いや悪ガキでもない限りは誰も来ない。安心して修練に打ち込める。

「誰だ！」

人の気配を感じて参道を見てみればかがみとつかさがいた。

「お前らか。もう夜も遅い。何しにきたのかは知らんが、早めに帰ったほうがいい。」

「そこまで言わなくてもいいでしょ。でも、お父さんが言ってた通りね。」

「師匠が？なぜまた？」

「大和君のお父さんが修行に来てた時、よくやってたらしいから同じようにやってるんじゃないかなって思ってたね、差し入れ持ってたの。」

つかさが持っていた袋からおにぎりが出された。

「おお、ありがとう。助かる。」

時計を見てみればもう21時半を過ぎていた。ここに来たのが20時15分ごろだったから

一時間以上も経っていた。何時の間にも思ったが、まあ、べつにいいか。丁度いい。休憩しよう。

「うん、上手い。」

本殿の階段に腰掛けて、差し入れのお握りを頬張る。やっぱり運動後は塩のおむすびで梅干入りが一番だ。そういや昔どっかの祭でそんな歌詞の唄流れてたな。今はどうでもいいか。

「大和君、その槍とか刀って誰にもらったの？」

つかさが俺の武具を見ながら聞いてきた。

「ああ、俺の住んでるトコに鍛冶屋やつてる人がいるからその人に作ってもらったんだ。鞘と柄とかの拵えは別だけだな。」

だが、実際に作ったのはアイツだ。俺のかつての幼馴染の一人で鍛冶屋の息子、俺に饒別といって渡してくれた。

く???く

「ヘエツクシ!!!」

突如くしゃみがでたが、唾とかをかけないようにギリギリそっぱを向けた。なんだいきなり？

「花粉症か？」

「だったら目もやばくなってるはずよ。誰かが俺の噂してんだ。誰かは知らねえけど、悪い噂流されねえように腕磨くだけだ。」

再び鎚を構えて熱せられた鋼を鍛える。火花で焼かれる痛みは慣れてほとんど感じなくなった。さて、もう一踏ん張りだ。

くかがみ視点く

ふと、昼間気になったことを聞いてみた。

「さつき、ゆたかちゃんから質問されたじゃない？どうしてプロにならなかったのって。あれの答え多分嘘でしょ？」

つかさも同じように感じていたらしい。

「まあな。だが本心ではないってだけで、あれも本当だ。どこでわかった？」

「雰囲気とかかもね。で、本当のところはどうなの？」

「今は話したくない。もう少し時間が経ったら話す。ま、それ程重い理由ではない。」

さつきのような違和感はない。

「何時ぐらいになるかな？あ、もちろん急かす気はないよ。」

「ここに馴染んだらだが、つかさのことだ、忘れちまうんじゃないか？」

「大和君、流石にひどいよ！」

「悪い悪い。」

顔には出さなかったけど、同意見だわ。

「さて、そろそろ再開するか。二人とも、もう帰ったほうがいい。さすがに遅い時刻だ。」

時計を見ればもうすぐ午後10時になろうとしている。確かにもう

帰ったほうがよさそうね。

「無理しないでね。じゃあね、お休み大和君。」

「そのくらいはわかってる。差し入れありがとよ。」

私たちが参道を歩いていると棒を振り回すような音や風を切る音が聞こえてきた。

「頑張ってるね。」

「そうね。」

あれほどの腕になりながらも更に高みを目指そうとしている。負けてられないわね。何をかって言われればまだ解らないけど、まだ先は長いんだ。自分なりに見つけていこう。

第三話 集う人々（後書き）

次話は少し時間が飛びます。

第四話 初仕事・初対面

桜が咲き誇り、入学やら入社シーズン。こっちに越してから今日まで長いやら短いやら変な感覚もするが、まあいいや。

俺が入社した会社は高速道路を主に管理する他にＪＲや各電力会社との連携してライフライン等の社会基盤の整備や管理、維持を行っている。

昨日、入社式が終わり、今日よりこの後１ヶ月ぐらい研修でその後各部署への配属かと思いきや・・・

「ああ、国生君、確か土木科卒業だったよね。」

ライフライン課の上司の方が俺を呼び止めた。以前聞いたところ同じ学校卒業しているようで、実質的に先輩と言うわけだ。直属になるかどうかはわからないが、可能性は高い。

「はい、実技はまだですが土木施工２級と測量士補もあります。」

この二つの資格のお陰でここに入社できたようなものだ。

「んじゃ、研修はいいから今日から現場出て。管理、作業共々人少なくてな。作業着は持っているだろ？」

「はい、現場はどこですか？あと、内容は？」

「陵桜学園付近の下水管関係だな。一応、今日だけは迎えにきてくれるから場所覚えとけ。作業は合流式から分流式への切り替えだ。」

初めてだから作業が多くなると思っし、わからないところがあると思うが大丈夫か？」

「はい、大丈夫です。となると、この課に配属ってことですか？」

「いや、あくまで研修の一環だ。君は基礎技術と知識はあるから現場の雰囲気わった方がいいと思ってね。」

「成る程。ありがとうございます。」

先輩の車に乗って俺は現場へと向かった。渡された地図と作業内容を頭に叩き込む。現場は確か陵桜学園と言ってたな。・・・？待てよ確かあいつらの学校もそういう名前だっただは。やれやれ、こいつあやりづれーな。

「現場」

「おい、新入り！土留めに使う鋼管を運んでくれ！」

「はい！」

いかに俺が土木科出身とはいえ、現場の知識はあつてないようなものだ。だから最初のうちは他の作業員の方と同じように作業を行う。そうして現場の流れや雰囲気を身につけるわけだ。

土留めに使う鋼管・・・すなわち地面を掘削した時に削ったところが崩れないようにするための鉄板を留める柱を運ぶ。詳しくは脚のようなものだが、大体通じるのはベテランとその意味を捉えるよう教えた教師とそれを教わった生徒のなせる技か。もともと、土木科

ではちゃんと習うことだから特別に言うことでもなかったりする。

鋼矢板つてことはここらへん地下水多いのかな？鋼管矢板ではないから比較的安定した地盤のようだが。

「おい、剣スコ（先がとがったスコップorシャベル）持ってきてくれ！ネコ（手押し車）も頼む！」

考える暇もなく次の指令が入る。現場用語はきついが、何となくわかるし、他の人のを聞いてればいい話だ。・・・なんで一輪車（手押し車）がネコなんだ…？

資材、用具置き場と現場を何往復したのかわからなくなってきた所でやっと昼飯となった。10往復以上はしたろうな。早く飯食いたい。

・・・飲み物忘れた。この学校の自販機使つか。配管確認するために入園許可証は持つてるし。

（みなみ視点）

朝から工事の音が聞こえてくるけど、先生の声が聞こえなくなるということはなく、普段の私の話し方でもゆたかやひよりもちゃんと伝わるぐらいで、むしろ静かという印象を受ける。

「工事いつまで続くんだろうね？」

「私としては早く終わってほしいけど。うるさいし。」

「なんで？教室からは結構遠いよ？」

「アニ研にとっては一番近いからね。だから振動まで伝わるよ。」

いつも通り、二人の会話を聞きながら自動販売機に向かう。

「みなみちゃん、なににするの？」

「コーヒーかな？昨日ちょっと遅くまで勉強してたから。」

確が気が付いた時には日付が変わっていたと思う。道理でチェリーがじゃれてこなかったわけだ。

「ふーん。がんばるねえ。私は基本原稿優先だよ。って、誰だろあの？」

見てみれば自動販売機コーナーにヘルメットをかぶり、作業着を着て、安全靴を履いている人がいた。少なくとも、ここの関係者ではないだろう。

「侵入者って事はない・・・よねえ」

「あ、あのひょっとして大和さんかな？ヘルメットに書いてあるし。」

「ゆたか・・・知ってるの？」

「うん、ほらお姉ちゃんや柊先輩たちと同じ歳で去年甲子園で優勝した投手の人だよ。本当はこの前パティちゃんがみなみちゃんたち

と初めて会ったときに一緒に挨拶する予定だったんだけどね。」

ゆたかのその声に大和という人は苦笑いしつつ振り向いた。

「誰かと思えばお前か。あまり、甲子園の話題を出さんでくれ。この学校とも練習試合でやりあったから。・・・ところで、その二人は？」

「ゆたかの友達の岩崎みなみです。」

「同じく田村ひよりっす。」

「俺は国生大和だ。本当は春休み中に挨拶する予定だったんだが、いろいろと狂ってしまっただけ。今日まで遅れてしまい申し訳ない。」

「・・・どこもなくみゆきさんと同じような感じがする。しっかりしているというか落ち着いているというか・・・。」

「そっぴいえはなぜここにいるんすか？」

「飲み物忘れて。下手すると脱水症状起こしかねんから買いに来たんだ。学校の方が何かと安いし、早く体に水分が滲み込むヤツが多いからな。・・・っとすまない。飯食う時間が無くなっちゃうからもう行かねば。んじゃな。」

「はい、また後日。」

みゆきさんと同じ歳なら卒業してから1カ月ぐらいしかたってないはず。だというのにあの人の落ち着いた雰囲気はなんなのだろう。

「次の原稿は野球モノでもしてみるツスカねー。」

「ひよりちゃん野球のルールわかるの？」

「バ〇〇リ〇とかお〇振〇とか見てるからね。」

「みなみちゃんは？野球とかソフトボール得意そうだよ。」

「私は体育とかでやったぐらい……。でも、ドラマとかは見るから割と……。」

「みなみちゃんコントロールもスタミナもいいからピッチャーやれそうだね。しかも4番で。ゆーちゃんは1番で外野かセカンドかな？」

「あはは……。やっぱり外野か。」

「いや、ライトは肩強くないといけないし、センターは守備範囲広いし、レフトは引つ張った強い打球が来るから難しいらしいね。」

「へえ。じゃあ、なんで私が1番なの？」

「んーちよつとそこは答えにくいんだよね。いろいろあるし、私も詳しくはないから。」

十分詳しいとは思っただけだな……。

「あ、だったらあの人に教わってみたら？ついでに技術とかも。」

「仕事とか忙しそうだし……。多分無理じゃないかな……。第一、

住んでるとこもよくわかんないし・・・。」

その時はひよりの意見を軽く流したけれど、のちに本当の事となるのは思ってもいなかった。

↓その夜 大和視点↓

「つ・・・疲れたぞこいつぁ・・・。」

家に帰って座布団に腰かけた途端、初めての現場と仕事の疲れが俺を襲い、今日は晩飯作らずさっさと眠りたいという欲望が押し寄せてくる。肉体的というよりは精神的な疲れだ・・・。何も考えず、ただひたすらに休みたい。

「コントロール重視でクサイところについている方が疲れたもんな・・・。」

俺の場合、基本的には平気で2個分は外していた。意図的にはなく、体幹バランスから勝手に暴れて外れていく。だからコントロール重視だとそういう誤差を調整する必要があり、余計なウェイトができてしまう。俺の決め球は真ん中高めと言われているが、実際は体が暴れて高めにずれてしまっているだけだ。

「今日は簡単なものでいいか・・・メール着てる？」

食わなければ疲れも取れない。晩飯を作ろうとした時、携帯にメールが来ていたことに気付いた。

「つかさから？」

メールの送り主はつかさだったが、内容はかがみに関することだった。

「やれやれ・・・ちよっくら行つてきますか。もう一仕事だ。」

高校時代の友人が作った特製プログラムの入ったUSBと自分用のパソコン&アダプターをザックに詰めて柊家へと急ぐ。

「法に引つかからないかが心配だ・・・。」

第四話 初仕事・初対面 (後書き)

第4話いかがでしたでしょうか。感想・意見よろしくお願いします。

第5話 メール復元

「30分ほど前 かがみ視点」

「むー。また迷惑メールだ。アドレス変えてるのになんで来るんだろ？」

着信に気付いてメールを見てみれば数人に送らなければ殺されるという内容のチェーンメールで、またかと思いつつ削除しようとした時だった。

「あつ……。」

選択削除と全削除のボタンを間違えて押してしまい、今までのメールがすべて無くなってしまった……。

「お、お姉ちゃん大丈夫？あの……。その……。元氣出して……？」

「消えちゃったモノはしょうがないでしょ。大げさな。ほつというもまた直ぐに溜まるわよ。」

つかさにはそう言ったけど、本当はショックだった。今までの思い出が消えてしまったのと同じことだし。

なんとかデータ復元する方法ないかなと説明書やネットを検索しても有用な情報は得られず、あきらめると同時に涙が出かけた。

「……わ、びっくりした。え、何かいっぱい……。みゆき？日下部！？え……。え……。！？」

続々と友人からのメールが届く中、つかさからのメールが最後から2番目に届いた。

「お姉ちゃんへ 余計な事だったらごめんね。私だったらやっぱりすごくショックだと思ったから……。早く元気出してね。」

事の真意を知り、お礼を言いたくても顔がまともに見られないと思いつつも「ありがとう」と簡単に返信した。

でも、その次に届いた大和君からのメールは私の想像の斜め上を行っていた。

「特にケータイの設定をいじらないようにしてくれ。ひよつとしたらデータ復元可能かもしれない。これからそっちへ向かう。パソコン使うからスペース広いとこ用意しといてくれ。」

これからって……。もう遅い時刻と思っているうちに玄関の呼び鈴が鳴った。早っ。

「で……。ちよつと貸してみ。」

お父さんたちに挨拶した後、大和君は私のケータイをケーブルで自分のパソコンとをつなぐと、あるソフトを立ち上げた。

「これ、いつデータ消したんだ？」

「一時間ぐらい前かな。てか、できるの？」

「1時間ぐらいなら割とできるもんだ。データのカケラみたいなもんが残っていればこのソフトで可能だ。」

「そのソフトはどこから？買ったの？」

「いや、俺の友人が作った。プログラミング授業の一環として作ったんだ。」

マウスやキーボードを打ち込む音だけが響いてくる。

「モバゲーとかのサイトからのメールはどうする？」

「いらなかな。」

「ならいい。優先的に削除される分、復元が難しい。ガードが堅いってのもあるが。」

次々と新しいウィンドウが開いていき、項目が表示され、データが書き込まれていく。長門やキラのような速さはないけど、常人からすれば早い方だろう。

「・・・こんなもんか。」

「もう終わり？」

「俺の分は。後は仕上げをごろっじろってとこか。この分だと後30分ぐらいで終わるな。流石アイツの自作ソフトだ。」

大和君が大きく息を吐いて背筋を伸ばすのと同時にお風呂から上が

つたつかさが入ってきた。

「あれ、大和君来てたんだ。何してるの？」

「ああ、さつきからお邪魔している。見た通りデータの復旧。もうすぐ終わるけど。」

「へえ、直せるんだ。すごいね。・・・ところで、なんで作業着着てるの？」

ケータイの件で今まで気にしてなかったけど、大和君は薄緑の作業着を着ていた。しかも、裾のあたりは泥の後のような汚れがあった。

「今さつき帰ってきたばかりだよ。初日から現場出るとは思わなかった。さすがに疲れたけどな。」

「お疲れ様だね。あれ？てことは夕飯とかはまだなの？」

「当たり前だ。でも、今日は別にいいかと思ってる。腹減ったと感じないし。」

「だめよ。体壊しちゃうわ。」

「夕飯残ってるから食べてって。お弁当にしても余りそうだし。」

「そうか。すまないな。ご馳走になる。」

くつかさ視点く

お風呂から上がると、居間の方から大和君とお姉ちゃんの話し声が聞こえ、行ってみるとお姉ちゃんのケータイのデータを復旧させているところだった。

大和君は夕飯を食べていないらしく、まだ完全に復旧するには30分ほどかかるようなので、食べていくことになった。

「冷めちゃってるから温めなোসないと・・・。」

だいぶおかずやお味噌汁が冷めてしまっているので温めなオす。

「うん、これでいいかな。できたよー!」

居間の方に声をかけると大和君とお姉ちゃんがやってきた。

「おお、美味そうだ。いただきます。」

席について食べ始める大和君にお茶を、お姉ちゃんにジュースを出す。

ひたすら大和君は食べていく。やっぱりお腹空いてたんだ。

「おいしい?」

「ああ、そっいや人の飯食うのは久しぶりだな。」

「そっか一人暮らしだったわね。一人暮らしってどうなの?」

「気楽。でもやっぱり寂しいね。誰もいないのは。」

「ああそれわかるよ。起きたときに誰もいないのは辛いよね。」

「そりゃ寝過ぎだ。そういや、お前らの出身校って陵桜だったよね？」

「そうだけど、何かあったの？」

「今日現場がその近くでさ。ゆたかとその友人にも会ったよ。」

「ひょっとしてみなみちゃんとひよりちゃん？」

「だな。パトリシアはいなかったが。多分、なんだかんで人に囲まれてんだろ。交換留学生なんて俺の高校じゃやってねーし。」

「そつか。んじゃ、あと会ってないのはみゆき、日下部、峰岸だけかしら？」

「メールでこなたから話は聞いてる。写真も送られてきたし。一応軽いあいさつ程度は済ませておいたが、いずれちゃんと会わねばな
と思ってる。」

「そついうところ本当にこなちゃんは抜け目がない。」

「いつか会えるといいね。」

「世の中は狭いからな。ひょっとしたら次の現場でばったりと会う
かもしれん。」

「だったら、今週の日曜日空いてる？」

「今のところは。」

「権〇〇堤が桜の見ごろなのよ。出店とかも出るし。だからみんな誘ってるんだけど。」

「ほう。それは名案だ。」

今週も楽しくなりそう。

〈帰路　大和視点〉

二人に別れを告げ、帰路に着く。師はもう寝ていた。もう夜の10時越してたしあたりまえか。

「久しぶりに食ったな……。人が作ってくれた飯……。」

こっちに越してから初めてか。……。最後に実家で食った飯は何だったわけ？

いや、この数週間、新生活新環境でバタバタしてたし実家を思い出したことすら久しぶりだ……。

「こうして忘れてくもんなのか……。」

俺の幼いころの記憶がないのも、これと同じなんだろうか？いや、普通の人だったら5、6歳くらいのころを覚えてることもある。けど、俺には何もない。真っ白だ。

「思い出せないことに躍起になったって仕方ねーや。せつかく、かがみたちがこっちに慣れるよう花見とか用意してくれてんだ。そっちを楽しまなきゃ申し訳ない。」

だったらこれからをしつかり覚えていけばいい。何があつたか、誰がどうしたとか。まだ、あと60年ぐらい人生は残ってんだ。

そう思いながらチャリをこぐ。明日からも現場だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5045p/>

らき すた 紅蓮の若武者

2011年8月26日17時27分発行